

森の幼稚園における自然とふれあうことの意味

The significance of interacting with nature in the Waldkindergarten

学籍番号 47-096765

氏名 東方 真理子 (Toho, Mariko)

指導教員 鬼頭 秀一 教授

1.研究背景と研究目的

近年において、大気汚染や水質汚染、森林破壊、異常気象など、地球規模での環境問題が著しく深刻化している。そのような問題を解決するためには環境教育が必要であるとされ、国際会議などでは生涯にわたる教育として位置づけられている。環境教育では、「人間と自然との関係、人間相互の関係を含めた生態学的関係を改善すること」が重要であるとして、自然を理解するために「自然体験」をすることが必要であることが述べられている。

そのような自然体験ができるひとつの場として「森の幼稚園」というものがある。森の幼稚園とは一般的に、子どもたちが森などの自然のなかへ出かけていき活動する幼稚園として認識されている。2002年以降、日本でも森の幼稚園という言葉が耳にするようになった。テレビや新聞、雑誌などでもしばしば紹介され、幼児期の環境教育として注目されはじめている。

そのような背景から、森の幼稚園の教育は、環境教育として重要な要素をもっていると考えられる。森の幼稚園の研究論文は全体的に数少ないが、その中でも環境教育の視点からの研究が比較的多くおこなわれている。しかし、それらの論文の多くは、森の幼稚園を環境教育の視点からとらえて

いながら、環境教育に関しては、深く言及していない。また、森の幼稚園のどのようところが環境教育としてとらえることができるのかが定かではない。森の幼稚園の先行研究を見る限りでは、子どもたちが自然の中で自然体験をすることが重要であることは、なんとなく読み取れる。しかし、森の幼稚園とよばれない幼稚園でも子どもたちが自然の中で自然体験をすることはおこなわれている。自然のなかで過ごす、自然体験をするといっても、森の幼稚園の場合、どのように自然をとらえているのか、そして、何をもって森の幼稚園とするのが不明確である。ただ単に子どもたちを連れて森へ出かけていき、自然の中で活動することが「森の幼稚園」であるということはいえないのではないだろうか。

そこで本研究では、環境教育としての森の幼稚園が注目されはじめているなかで、ひとつの森の幼稚園を取り上げ、子どもたちがどのような自然のなかで、どのような自然とふれあっているのかということを調査し、その特徴から森の幼稚園の要素を導き出す。そして、その要素を分析し、森の幼稚園と環境教育がどう位置づけられるのかということ、また、森の幼稚園において自然とふれあうということは何を意味するのかということを考察する。環境教育その

ものを問い直し、幼児期における環境教育について、その方法、あり方を森の幼稚園から提示する。

今後、森の幼稚園は、ますます注目され、増えていくことが予想される。本論文は、森の幼稚園における自然とふれあうことの意味、つまりは森の幼稚園の要素を提示することによって、森の幼稚園の実践をより円滑にすすめることができることにつながることを期待するものである。

2. 森の幼稚園の特徴

調査対象であるラインバッハの森の幼稚園と、一般的な幼稚園との違いを考えたとき、「Förster とのかかわり」「森を訪れる町の人々 とのかかわり」「不確実な自然」という3つの要素が浮き彫りになってきた。この3つの要素は、森の幼稚園の特徴として重要な視点であると考えられる。この3つに焦点をあて、参与観察、聞き取り調査、文献調査をもとに検証する。

3. Förster とのかかわり

Förster という森の専門家が毎日森に出入りし、森を管理しているというドイツの社会的な仕組みにより、子どもたちは、まったくの自然の森のなかであそんでいるわけではなく、ある程度の安全性が考えられた上で活動している。子どもたちは、森で仕事をする Förster の姿を見る機会があるので、誰かに意図的に教えられることがなくても、人の手を加えて生態系を維持する方法を日常的に学んでいる。また、Förster から森や森に生息する動植物のことなどを教えてもらう機会があり、森や自然についての知識を、より具体的に習得することができてい

る。

4. 町の人々 とのかかわり

森の幼稚園は、町に隣接した町の森でおこなわれている。ドイツでは、どこの町に行っても必ずと言っていいほど、森が隣接している。そして、そのほとんどの森は、市町村が所有しており、町の人々が気軽に自由に訪れることができるのである。暖炉のための薪を集めたり、果実をとったりすることもあるが、現在は、ほとんど、安らぎの場として利用されている。ラインバッハの森では、平日の午前中は、犬を連れて散歩している人々、健康維持のため、ジョギングしている人々、自転車で走っている人々、保養のために散歩、森林浴をしているお年寄り、体育の授業で、マラソンをしている中学生たちが訪れ、週末や休日になると、家族連れやさまざまな人々で、あふれかえる。森を訪れている町の多くの人々が森の幼稚園の存在を知っており、子どもたちは、Förster を含め、森に自由に入出入りする町の人々との接点を持つことができている。森のなかで、いつ、どこで、どんな人と出会うかわからない。子どもたちはその場の状況に対応していかなければならないのである。子どもたちにとって、森を訪れる町の人々 とのかかわりは、社会のことについて知るだけでなく、コミュニケーション能力の促進にもつながっている。そして、地域社会に見守られて育てられているといえる。

5. 不確実な自然

森の中では毎日状況が異なる。季節や天候によって、見られる動植物は違うし、動

植物の変化、成長が見られ、そのことにより、子どもたちは、毎日新しい発見をしていく。一般的な幼稚園では、ある程度予測できる場所で予測できるものを使って教育されているが、森の幼稚園では、管理された森（自然）の中で活動が展開されているとはいえ、次に何が起こるかわからない。森を歩いていて、どのような場面や場所で、どのような生き物に出会うのか、予期せぬことが多いといえる。また、雨、風、雪、寒さ、暑さなど、天候の変化が常にあり、それによって、自分たちが対応する術を考え、行動をとらなければならない。晴れていたのに突然雨が降ってきた、道がない森の中をどう歩くのか、など、環境の変化に対応していく、対処していく力が、森での活動の中で培われていく。また、生命の死に直面したり、自然現象を体験する中で、自然は人間がコントロールできない面を持っており、人間には限界があることを知る。安全性と不確実性という2つの面がある自然のなかで、自然や人間とどのようにつきあっていくのかということを学んでいる。

6. 日本における環境教育

以上のような森の幼稚園の特徴を「環境教育」という視点からみるとどのように位置づけられるのだろうか。

日本では、公害問題をどう解決していくか、公害を起ささない社会をつくる人を育てるという教育から、海外の動きに応じつつ環境教育へ移行していくが、行政レベルで環境教育の取り組みが本格的に展開され始めるのは1987年以降である。現代の日本の学校教育の中では、環境教育というものがおこなわれているが、環境教育関連の計

画が立てられていないこと、全体として扱う内容・機会に偏りがあること、環境教育を取り上げる際に扱いやすい環境問題に偏りがちであること、目標の設定が広範囲すぎるなどという問題があげられている。また、教師側は環境教育が系統的でない。一方、子どもにとっては環境学習で入ってくる知識が断片的であるという問題があり、環境教育は総合学習で取り上げる場合が多いので「子どもたちに環境問題に関心を持ってもらえれば、あるいは環境と環境問題に関わりがあれば何を取り上げてもよい」ということになり、子どもたちにとっても教える教師にとっても断片的なものになりがちである。つまり、現代の日本での環境教育は、学校教育のなかで、おもに理科教育のなかで取り上げたり、総合的な学習の時間などで環境教育を教科として扱うなど、環境教育の全体性がみえない、狭められたものになってしまっているのである。

7. 環境教育とはなにか

「環境教育」を考えるときには、その前提として「環境(environment)」とはなにかを考える必要がある。そして、理科教育としての環境教育や教科教育としての環境教育ではなく、もっと広く、人間をとりまく自然的環境、社会的環境、精神的環境の3つの領域を全体として考えられなければならない。私たちが考えるべき「環境教育」は、自然的環境、社会的環境、精神的環境の3つを全体としてとらえ、単に環境問題解決に限定することなく、自然と人間、人間と人間の間を関係を考え、そのなかで人がどのように生きていくべきなのかということ考

える教育なのである。

8. 森の幼稚園と環境教育

森の幼稚園の特徴をみると、狭い意味での環境、つまり、生態系、環境問題、自然保護や環境汚染などという意味だけではなく、それらを含めた人間同士のつながりがある社会、自然と人間のつながりがある社会、また、動植物や自然現象が含まれた全体的な自然、そして、人間の感情、思いや価値観などの内面的な精神といった広い意味での環境を森の幼稚園では意識している。だからこそ、ラインバッハの森の幼稚園の規約には、「社会構成のなかでヒューマニズムとエコロジーの意識を育てる」という目的が掲げられている。

また、森の幼稚園は、社会教育的、野外教育的な要素を含んでいるということがいえる。しかし、日本では、環境教育、社会教育、野外教育はそれぞれ別の枠でとらえられてしまっており、それぞれの教育の要素は別のものになってしまっている。それゆえに、森の幼稚園は、従来の日本での狭められた意味でとらえられた「環境教育」ではとらえきれない。森の幼稚園は、社会教育、野外教育の視点も含めた自然的環境、社会的環境、精神的環境を全体として見るといった広い枠組みで見たときにはじめてとらえることができるのである。

9. 森の幼稚園における自然とふれあうことの意味

一般的に幼児期における環境教育というと、幼児にできるだけ自然環境にふれさせること、自然とふれあうことを通して環境への興味を持ち、環境問題を解決していく

人間を育てることであると示される、つまり自然体験が強調される。しかし、どのような自然とのふれあいなのか十分に言及されていない。その「自然とふれあうこと」の内容こそが、環境教育において考えられなければならない重要なことである。

森の幼稚園において自然とふれあうということは、単なる自然そのものとのふれあいだけではない。人間は自然と切り離された存在ではなく、自然のサイクルの一部であることを認識する「Förster とのふれあい」、いつ、どのような場所で、どのような人に出会うかわからないことで、それに対応していくコミュニケーション能力が育ち、地域社会とのつながりをもつことができる「森を訪れる町の人々とのふれあい」、次に何が起きるかわからない状況に対応していくことが求められ、人間にはコントロールできない自然があること、人間には限界があることを知る「不確実な自然とのふれあい」がある。

森の幼稚園において自然とふれあうということは、さまざまな意味を持つ自然や、自然にかかわる人々とふれあいのなかで、自分自身が生かされていることを感じ、また、どのように生きていくのかということを考えることなのである。

参考文献

鬼頭秀一・福永真弓共編, 2009, 『環境倫理学』, 東京大学出版会.

今村光章, 2011, 「森のようちえんとは何か-用語『森のようちえん』の検討と日本への紹介をめぐる-」, 『環境教育』 Vol.21-1, pp.59-67, 日本環境教育学会.